

産業道路と鐵道

貴族院議員 青木周三

過般の第五十六議會を通過した總豫算の中に於て、産業道路助成に關する二百萬圓の費用が認められた事は、其の金額が總體の産業道路改良の計畫に比して餘りに少額ではあるけれども、併し從來休止の形にあつた所の此の政策が再び芽を吹いたといふ點に於て、吾々は之を祝福せざるを得ないのである。余は此の機會に於て、専ら産業道路と鐵道との關係に就て卑見を述べて見たい。

道路改良の必要なることは今更喋々する迄もないが、道路と鐵道との關係に就ては、將來の交通政爲策上、政家の考慮を要すべき點が多々あると思ふ。

抑々十九世紀に於ては、道路といふものゝ觀念の中には、其の道路上に機械を動力とした運搬が行はれるといふ考は含まれて居なかつたのである。即ち道路といふものは、全く人馬の通行の爲に出來て居るものであり、之に反して鐵道は機械を動力とする所の運搬の爲に建設せられて居るものだといふ觀念であつた。然るに二十世紀に入つて自動車の發達に依つて、俄然道路といふものも機械

を動力とする所の交通の爲に使用せられるやうになつて來た。茲に於てか鐵道と道路の關係にも忽ち大なる變化を來さざるを得なくなつたのである。即ち是までは道路は單に鐵道の補助機關であつたものが、一躍して從來の關係を破つて道路は鐵道に對する競争者の地位に立つに至つたのである。隨つて茲に種々の問題を生じて來るやうになつた。

鐵道は言ふ迄もなく二、三哩の距離を隔て、停車場を設けて、此處に於て貨物や旅客を乗降せしめるのであるから、其の停車場に集散する所の貨物旅客を運搬する爲に道路が無ければならない、即ち道路は鐵道の補助機關として最も必要であつたのである。隨つて從來は道路も専ら其の意味に於て力を注いで居つたのであつて、即ち從來の國道であるとか縣道であるとか、其の以下の重要な道路は、概ね鐵道に並行して開設せられたものであつた。

斯様に良い道路が鐵道に並行してあつた所へ、其上に自動車が走ることにになると全國の道路が悉く鐵道の競争線を成すことになつて來たのである。是は勿論日本ばかりのことではなく歐米諸國でも皆さうである。否、歐米に於ては道路が良かつたから鐵道が自動車に競争せられることは日本よりズツと烈しいのである。是は鐵道より優良な交通機關が出來た爲に、鐵道が競争せられるに至つたのであるから已むを得ないことであつて、それが爲に鐵道と並行する道路を廢止するといふ譯には尙更以て出來ない事であるし、又兩交通機關の競争に依つて國民は利益を享けるのであるから、甚だ結構なことであるのである。

所で今度内務省の計畫に依る産業道路といふのは、從來の指定道路即ち縣道を自動車の通るやうに、國費を以て補助して、之を改築しようといふのである。從來の内務省の事業として、僅かに年に二百萬圓そこゝの費用を掛けてやつて行く分には、大した問題ではないけれども、全國的に道路を改良新設して、自動車交通網を樹立しようといふ際には、餘程慎重な考慮を要する問題だと思ふ。

今迄は鐵道は鐵道、道路は道路と別々の考を以て計畫を樹てゝも大なる差支は起らなかつた。然るに産業道路として自動車交通に堪へる道路を造つて、それが鐵道と同じ目的を達するといふことになる。鐵道の建設の計畫と離れて考へることが出来なくなる。

日本の鐵道は人口に比しても、面積に比しても、歐米の何れの國よりも貧弱である。隨つて鐵道の建設を要望する聲は甚だ急なるものがあつて、如何なる政黨と雖も此の勢ひに抗することは出来ない。併し鐵道を造れば必ずそれに並行する道路が必要であつて、其の道路は自動車を通ずることが出来るやうにする必要があることは前にも言ふ通りである。すると自動車と鐵道と稍々同じ働きをする交通機關が二つ出来ることになる。其の地方が利便を享くることの大なるは謂ふまでもないが、二重の資本を要することは之を否むことは出来ない。

日本の鐵道は歐洲で最も貧弱な伊太利に比しても尙貧弱である。切めて伊太利ほどの鐵道を有したいといふ希望があることは尤もである。けれども十九世紀は鐵道の時代である。十九世紀に繁

榮した國が鐵道を多く有することは當然であるが、二十世紀に於ては軈てそれが惱みの種である。歐洲は馬車から鐵道自動車と進んで行つたのであるが、日本は馬車の時代を抜いたと同じやうに鐵道も亦いゝ加減にして自動車に飛び附いたと言つても何も不思議はないのみならず、却つて資本の利用上賢明の處置であらねばならぬ。だから既に鐵道に依つて相當に交通の便の開けて居る所の道路の改良も必要は必要であるが、それよりも鐵道の無い地方の道路に産業道路を選んで、未だ鐵道の恩澤に浴しない地方に新交通機關の惠澤を施すやうにしたら、一方に於ては資本の利用効率を高め、一方に於ては國家の惠澤を公平に分配すると同時に、地方の開発を擴張することが出来るであらうと思ふ。

鐵道の建設費と産業道路の助成費とを金額だけを以て比較するといふことは、性質上異なる所があるから間違ひを生ずるけれども、それにしても近來の道路の交通は鐵道の働きと大なる差違が無いやうになつたのであるのに、鐵道は年々八千萬圓を計上し、道路は國道と産業道路の補助費を加へても七八百萬圓そこゝであるといふことは、國家の交通政策上統一が取れて居るとは言はれない。而も近來の國有鐵道設計畫が主として幹線に對して注流する支線的使命のものであるから、所謂地方的の交通であつて、自動車の交通に託して差支のない所が多いのであるから問題であるのである。

吾輩は第五十六議會に於て現内閣の鐵道の新線の計畫が餘りに杜撰であつて、且つ浪費的のもの

であることを非難したことがある。それは新計畫の大部分が地方的の小交通であつて、多くは自動車に依つて目的を達せられるものであるのみならず、鐵道が出来ても道路がなくては濟まないものであるから、二重の資本を投下せねばならぬ故に寧ろ鐵道に代へて立派な道路を造つて、自動車で交通を圖つて、相當に其の地方が繁榮を來して自動車の交通を以てしては輸送力が不足を訴へるに至つた時に初めて鐵道の計畫を立てるといふやうにしたら宜いと思ふからである。自動車は比較的短距離で輸送數量の小なる場合には頗る有利であることは論を俟たないのであるから、今度の計畫の新線の如き場合には最も適當して居るのである。

鐵道は自ら利益を擧げるから多くの金を掛けることが出来るけれども、道路は收入を擧げることが出来ないから多くの金を掛けることが出来ないと考へる人もあらうが、それは間違ひである、今度の新線の建設費は平均一哩當り三十萬圓位について居る。而して其の收益率は平均一分に達するか達しない位であると計算せられて居る。若し之を産業道路の助成とするならば、一哩一、二萬圓で出来るであらう。五分二、三厘につく國債に依る金で一分位の利益率の鐵道を造るとすれば、年に四分二、三厘の損失がある勘定であるから、一年の損失だけでも一哩當り一萬二、三千圓に當る勘定である。それで産業道路を助成して行けば鐵道一哩の一年分の損失で一哩の産業道路が助成出来る勘定である。だから其の産業道路に於ける自動車輸送に依つて、鐵道の幹線が榮養を受けることになれば、鐵道經濟が此の助成費を支辨しても宜い譯である。鐵道は年々收益勘定からして、私設鐵道に

補助を支出して居て、其の金額が年額八、九百萬圓に上つて居る。其の補助の方法は建設費の五分以内を十年間を限つて年々補助することを得ることになつて居る。五分の利息が半年毎の複利で集積して行けば十二、三年目には元本と同額になるのであるから、稍々建設費の全部を補助することになつて居るのである。朝鮮とか北海道では七分とか八分とかになつて居るし、年限も長くなつて居るものがあるから、建設費以上を國庫が支出するものがあるのである。若し産業道路が鐵道と同一の目的を達することが出来るものとすんなら、鐵道會計が其の三分の一の助成金を支出すべき理由は十分にある。であるから、今後は鐵道の新線の計畫の際に産業道路を共に考慮すると同時に場合に依つては鐵道會計が自動車の通行し得る道路の築造に向つて助成金を支出する方法も考へて見なければならぬと思ふ。

○

又それと同時に鐵道省が自ら自動車輸送を營業することも考へて見たら宜いと思ふ。若し前に述べたやうに鐵道會計が自ら助成した産業道路の如き所で、他の自動車營業に關係の無い所であるなら、頗る面倒がないから、鐵道省は鐵道營業の代りとして自動車營業をして、旅客貨物の輸送をしたら宜いと思ふ。自動車營業が旅客に於ては大に便利であることは既に多くの人の知る所であるけれども、貨物に就いては運賃の不廉を心配する人が少くない。けれども自動車は積載量が貨車に比して小なのと、大體荷馬車の通ふ所は通行することが出来るので、小運送を兼ねることが出来るから、汽車賃と小運送費を合して計算すれば大して高くはならない。それに鐵道省の如き大組織で經營

すれば現在各地に散在する小資本の自動車營業のやうな高率の運賃を取る必要はあるまい。

鐵道が自ら自動車營業を行ふといふことは間接に自動車製造工業に偉大なる刺戟を與へるやうになることと思ふ。現在鐵道用の材料及運轉材料の如きは、今は皆内地製品であつて、一つも外國から輸入するものはない。是を明治四十年前後何もかも外國に仰いで居た時に比較すると隔世の感がある。是は鐵道が國有鐵道の大組織に統一せられて、其の注文が内地の製造工場の維持に十分なる纏つた數量が出来たからである。今のやうに小資本の自動車營業が分立して居たのでは、假令同じ數量の自動車を使用して居ても、内地の製造を促すに足らないが、之が鐵道省の如き大組織に纏つて來ると、自ら製造工業に刺戟を與へることになると思ふ。

以上は大體議會に於ても述べた所であるが、産業道路の發足の首途に當つて此に再び之を江湖に訴へたいと思ふ。(完)

